
未来への約束

さより

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来への約束

【Nコード】

N1485U

【作者名】

さより

【あらすじ】

口は悪いけれど、成績優秀でスポーツ万能な幼馴染の流。そんな彼を一途に想う静香。彼女はただ彼の力になれるだけで良かった。しかし彼の心無い言葉で壊れる2人の関係。悲しむ彼女の前に現れる、強引な1人の男。揺れる静香の決断とは？幼い頃に交わされた約束は、果して叶うのだろうか？

未来への約束 第1話

「静香俺と結婚しよう」

「けっこん？けっこんって何？」

「お前はそんなことも知らないのか？結婚ってのは、好きな奴とずっと一緒にいるって、約束することだ」

「うん！いいよ、流とけっこんする！」

「よしこれで俺たちは、ずっと一緒だな……………」

ピッピッピッ、ピッピッピッピッ

「……………うん」

いつもの時間いつものように静香の目覚まし時計が部屋中に鳴り響く。

ベッドから腕をだし慣れた様子で目覚ましを止めると、ゆっくり掛け布団を剥ぎ起き上った。

「今日も1日頑張ろう」

かみしろしすか
ほっせい
神城静香16歳は、

宝聖学園高等部に通う高校2年生だ。

宝聖学園は部活動に力を入れている学校で、

特に静香がマネージャーをしている野球部は甲子園の常連校で、宝聖野球部に入る為に宝聖学園に入る程の人気がある。

今年の夏に行われた甲子園でもその活躍は目覚ましいものだった。

なので部員数がとても多い、
それなのに静香はいつも5：40に学園のグラウンドに行き、
たった1人で朝連の為に準備をしていた。

野球部は人数がいるのでもちろん最初は何人もマネージャーがいた
のだが、

宝聖野球部のマネージャーの役割はとても多い。

朝連の準備もその中の1つ。

大半はあまりの大変さに、すぐに辞めていった。

それでも1か月前までは、3年の先輩マネージャーが3人いたのだ
が引退してしまい。

2年は静香しかマネージャーがいらない。

今いるのは静香と地味な仕事はしようとしないう1年マネージャー5
人だった。

静香は1年のマネージャー達に色々な仕事をして貰おうとするのだ
が、

部員と関われる様な仕事以外はしようとせず、裏方の仕事は静香し
かしていなかった。

静香は大人しい性格なので、何時も1年のマネージャー達に言い包
められてしまう。

先輩マネージャーが居た頃も、3年のマネージャー達は皆、

大人しい性格だった為1年達は好き勝手にしていた。

それでもマネージャーは静香と合わせて4人いたので朝連の準備も

そこまで時間は必要なかったが、
今では静香１人が準備をしなくてはいけない為、
静香は学園生徒の誰よりも早く学校に行き、１人で準備をしている。

朝連は毎朝７：３０から始まる。

今日も静香は７：００になんとか準備を終わらせることが出来た。
グラウンドでの準備が終わり静香が女子更衣室のドアを開けると、
１年のマネージャー達が声を掛けてきた。

「先輩、おはようございます」

「おはようございまーす」

１年のマネージャー達は今し方来たようで、全員ジャージに着替え
ているところだった。

彼女達はいつも静香の仕事が終わり、野球部の部員が来る前に登校
していた。

静香はこのままではいけないと考え、

１年のマネージャー達が着替え終わるのを待ち話しかける。

「おはよう…あのみんなに聞いて欲しいことがあるの」

マネージャー達はジャージに着替え何事かと一斉に静香を見つめる。
皆の視線に一瞬躊躇った静香だったが意を決し話し始めた。

「明日からは、６：３０にコートに来てくれない？」

「えっ、どうしてですか？」

「皆学校に慣れなくて忙しいから朝連の準備は無理って言ったよね、
でももう１０月だし…実は放課後の練習中も今皆がやってる仕事以

外にやつてもらいたいことがあるの…お願い」

静香の言葉に誰も答えようとしなかった。

しかし、しばらくすると1人の少女が話した。

「でも1年生はレポートの提出がもうすぐあるんで、みんな忙しいわよね？」

静香を見つめながらそう言うのと他のマネージャー達は次々に同意した。

「白羽さん…」

彼女の名前は白羽京香^{しらはぎきょうか}1年生には見えないほどスタイルが良く、顔も綺麗でモデルのスカウトに何度も合う程の美女だが、静香は彼女達の中で勝気な京香のことが1番苦手だった。

「私達がしているマネの仕事も大変ですし、これ以上忙しくなったら私倒れちゃいます。」

白羽は長い髪を指先に絡め面倒そうにため息を吐く。

「大変なのは分かるけど…」

どうにか頼もうと静香が白羽に1歩近づくが、

「静香先輩そろそろ部員も来ると思うので、その話はまた今度にしましょう」

「あっ」

「私今日はドリンク担当するので確認してきます。」

静香は話の続きをしようとするが、京香はそう言ってドリンク補充に行ってしまった。

「白羽さんずるい私もドリンク担当で」

残っていた後輩の1人が白羽を追いかける。

「うーんじゃあ、あたしはタオル担当であたしも確認してこよう」

「わたしも行く！」

「ならスコア表はアタシがします」

「……………」

皆静香が声をかける前に急いで移動した。

ドリンク確認もタオル確認も2人ずつも必要ない。

スコア表など今行つて、どうするというのがだろうか？

要するに皆部員の側で楽な目立つ仕事はしたいが、面倒で地味な仕事はしたくないのだろう。

（今日もダメだった……仕方ない、とりあえず朝は予備の道具点検と部費で買わないといけない物を確認しないと……そういえば傷薬と絆創膏が無くなりそうだったよね、薬箱見て確認しよう）

静香がそんなことを考えている内に、時計の針は7：25分になっていた。

（グラウンドに行かないと！）

静香はグラウンドに向かって走る。

「今日の練習メニューを発表する」

グラウンドに着くと幼馴染の流が部員達に、練習メニューを伝えて
いるところだった。

こしたにりゅう

越谷流は宝聖学園高等部の2年生で野球部の部長をしている。

3年が引退しまだ新しく部長になったばかりなのだが、
完ぺきに部長としての役割を毎日こなし、野球部の部員達には信頼
されている。

そればかりか流は成績優秀で外見も良いので、女子の人気は流に集
っていた。

現に今も静香以外のマネ達は、流を恍惚とした顔で見つめている。

（すごいな流は…私もあんな風に上手く話せるようにならないと）

静香は何でも器用にこなしてしまう流に憧れている。

それと同時に静香は流のことを想っていた。

しかし静香は他の女子達とは違い、

流と付き合いたい自分の気持ちを伝えたいと思ったことはない。

静香は流に誰よりも幸せになってもらいたいと考えているからだ。

静香の両親と流の両親は大学時代からの友人同士で、

静香たちが生まれた頃から住んでいる家も近くにあり、2人は幼馴染
染として育った。

幼い頃からずっと2人は一緒だった。

静香は流がいつも何事にも努力していることを知っている。

器用にこなすと言っても、流は天才なわけではない。

野球も勉強も努力しているから今の流がいる。
その過程を知っているからこそ、静香は流を好きになった。
だが何時からか、色々なことが出来る流と自分を比べ、
流の隣に自分は似合わないと考えるようになってしまった。

だから静香は隣に居られないのなら、少しでも流を支えたいと思う
ようになった。

今のところ流の側に、彼女らしき人を見かけたことはない。
もし彼女が出来てしまったら、胸が苦しくて泣いてしまうだろう。
それでも流の前では笑っておめでとうと言える自信が静香にはあっ
た。

それは流の幼馴染という世界で静香しかない立場があつたからか
も知れない。

「今日も1日気合い入れていくぞ」

流の話しが終わり部員達は各自練習に取り掛かる。

「静香」

静香も薬箱の確認をする為、

薬箱のある女子更衣室に行こうとすると、すぐ後ろで静香を呼ぶ声
がした。

「流」

静香が振り返ると流は静香の近くまで来ていた。

最近はまだ流から話し掛けられることのなかった静香は単純に喜
んでいたが、
流は何処となく不機嫌そうな顔をしていた。

「どうしたの？」

「最近マネージャーの仕事しているのか？」

「えっ？」

「3年が引退してから、お前が仕事している姿を俺は見たことがねえ」

流が言っていることの意味が、静香にはわからなかった。

「いくらマネージャーやつてる期間が長いからと言って、1年共に仕事を押し付けるな」

「……………」

「ちゃんとやれ、わかったな」

それだけ言つと流は静香の側を離れ、他の部員達の所へ走って行った。

（押し付けるな…か）

喜んで上がっていた気持ちが急速に下がっていく。

静香が仕事を押し付けている訳が無い。

静香は1年のマネージャー達の何倍も働いていた。

しかし最近は洗濯や部費のチェック、買い出し等で部員の前でするような仕事は、殆どしてこなかった。

変わりに部員達を応援しドリンクやタオルを渡すのは、何時も1年のマネージャー達だ。

そのドリンクさえも、作るのは静香の役目だった。

裏で静香が作ったドリンクをただグラウンドに持って行き渡しているだけなのだが、

流にしてみれば、何時も姿が見えない静香は、さぼっているのだと思ひ込んでいた。

有らぬ誤解をされショックを受けた静香だったが

（これも私が後輩の皆に上手く言えないのが悪いんだし、流に誤解されちゃったけど、私は私の仕事をしていれば流ならすぐ気付いてくれるよね）

そう気持ちを入れ換え女子更衣室に向かった。

（…… 98、99、100、うん100個ちゃんがある。）

静香は薬箱の確認を終え、倉庫で予備のバットやグローブ、ボールの数をチェックしていた。

最後のボールの数を、数え終え外に出るともう朝連は終わっていた。グラウンドから見える時計を確認した静香は走り出す。

（予鈴が鳴るまで後10分しかない、急いで着替えて鞆持って教室行かないと）

女子更衣室に着き中に入るともう誰も残っていなかった。

静香は制服に早はや着替え、教室に行こうと鞆を持つと、

隣の男子更衣室の扉が開く音がし、話し声が聞こえてくる。

「この時間ならなんとか間に合いそうだな、流」

「ああ」

聞こえてきた声は流と流の親友の中山彬なかやまあきらだった。

中山は明るく誰にでも優しい性格で、野球部の副部長をしている。そして流に次いで女子に人気のある人物だ。

（流と中山君もまだ教室行ってなかったんだ）

静香は先に教室に行こうと、女子更衣室の扉の前まで歩く。

「お前朝連の最中、静香を見たか？」

扉の前で静香の足はピタツと止まった。

「静香ちゃん？うーん俺は見えてないけど？」

「…やっぱり、アイツまたさぼったんだな」

（盗み聞きなんていけない、早く教室に行かないと）

そう思っているのに、静香の足は一向に先に進まない。

静香が葛藤している間にも、流と中山は着替えながら話を続けた。

「静香に今日、マネの仕事ちゃんとやれって言っただ」

「静香ちゃん何て？」

「返事もしなかった」

「だからってさぼったと決まった訳じゃないだろ？見えないとこで何かやってたかもしれないし、具合悪くて休んでたかもしれない」

「ここ最近毎日か？」

「うーん」

静香の心臓がドクドクと早まる。

（これ以上聞いちゃだめだ）

動かない体を無理やり動かし、扉に手をかけた。

「3年がいなくなつて怠けだしたんだろ、結局アイツも他の女と変わらねえ、出来もしねえ事言う、口だけの女だ」
「いくらなんでも言いすぎだぜ流、お前静香ちゃんと幼馴染なんだろう？」

「…ただ家が近いだけだ、幼馴染なんて言うんじゃないやねえ、あんな女」

バン！

気がつくとも静香は、女子更衣室の扉を乱暴に開け走り出していた。とにかく学校には居たくなかった。

1人になりたかった。

苦しく、悲しく、辛い、負の感情が静香を襲った。
けれど涙が出ていなかった。

それは泣く事すら忘れてしまう程、静香の胸が傷ついていたからだった。

静香は何処に行くのかも考えず、ただ、ただ走る。
流の声を忘れ去ってしまいたいと、願いながら…

「今女子更衣室から、音がしたな」

「誰かまだ残ってたんだろ」

「聞かれたかもしれないぜ？いいのか？」

「別に気にしねえ」

「お前は良くても…いやなんでもない」

中山は軽くため息を吐くと、男子更衣室の扉を開ける。

すると校門に向かい走る静香の姿が見えた。

「オイ流！マズイ、今聞いてたの、きっと静香ちゃんだ！早く追いかける！！」

後ろにいる流に叫ぶ中山だが、流は顔を下に向け動こうとしない。

「流！！」

流はゆっくり顔を上げた。

「…………俺は間違ったことなんか言ってるねえ」

「お前…」

「…そんなに気になるなら、お前が行けばいいだろ」

流は中山の横を通り教室に向かい歩きだした。

「お前が行かなきゃ意味ないだろ…馬鹿野郎」

中山は静香が走って行った校門を見るが、そこに静香の姿は無かった。

中山はやり切れなさを抱えながらも、流の後を追って教室に向かった。

未来への約束 第1話（後書き）

あらすじを読むと分るかもしれませんが、三角関係のお相手は中山ではありません！

自分で書いていて途中相手は中山でもいいかな？と思いましたが、流は中山がいないと暴走しそうで…（笑）

やはり流のフォロー役という大事な役割があるので、止めました。

次回は、もう1人の相手が登場します！

のんびり更新かもしれませんが、よろしければ2話目もお読みください！！

感想がありましたら、お待ちしております。

お読み下さりありがとうございました。

未来への約束 第2話

静香は学園の校門を過ぎてからも闇雲に走った。

走っている最中思い出したくもないのに静香の頭の中では、流が言った言葉が繰り返し、繰り返し流れていた。

『アイツまたさぼったんだな』

（やめて）

『結局アイツも他の女と変わらねえ、出来もしねえ事言う、口だけの女だ』

（イヤ）

『幼馴染なんて言うんじゃねえ、あんな女』

（お願い…思い出したくないの！！！！）

静香は無意識にいつも落ち込むことがある時に行く、

ベンチとブランコしかない公園まで来ていた。

ドンッ！

「きゃあ」

無我夢中で走っていた静香は公園を出ようと歩いている男がいるのに気づかず、

そのままぶつかってしまった。

「っと！」

ぶつかった反動で後ろに転びそうになった静香を、男は右手で軽々支える。

静香の顔は丁度男の肩口にあったが、男は気にせず静香の耳元で話し掛けた。

「前も見ずに走ると危ないぜ、大丈夫か？」
普段の静香なら、すぐさま謝罪とお礼を言って走り去っただろう。
だが流の言葉にショックを受けた今は、目の前の男から体を離す事も忘れていた。

「……………」

「おい！」

返事もせず身を任せている静香を不審に思ったのか男は、多少大きな声で呼び掛けた。

「…あつ」

その声で漸く（ようやく）思考が晴れた静香は、ゆっくり男の体から離れる。

「すみません、ありがとうございました」

頭を下げ1度男の顔を見てお礼を言うと、俯き公園の奥に行こうと歩き出す。

すると先程まで静香を支えていた右手が伸び、そのまま静香の左手首を掴む。

静香は手首を掴まれ驚き、男の顔を見た。

すると男は何処となく嬉しそうな顔をしていた。

しかしその表情は一瞬だけで、すぐに感情の読み取れない顔に変わる。

「アンタ宝聖野球部のマネージャーだろ？」

静香は手首を掴まれた時よりも驚いた。

「あ…あの」

「やっぱりな」

静香の様子を見て確信を持ったのか、男は手首を離し、ニヤツという効果音が似合うような、口の端を上げた笑みを見せ話し出した。

「俺は城両学園（じやうがくえん）のサッカー部の部長やってんだ。宝聖は近いからな、何度も練習試合に行ってたぜ。最近だと…1週間前だな。野球部はサッカー部と隣り合わせでグラウンド使うだろ？休憩中なんかはよく野球部見ててな。お前はマネージャー達の誰よりも働いてたから、覚えてたんだよ。この前宝聖行った時も野球部の様子見たが、今いる奴等は何だ？前にいた何人かはマシだったと思うが、今いる奴等はただグラウンドを見てるだけでやる気が全く感じられなかったぜ？いいのかあれで？」

いきなり弾丸のように話し出した男の言葉を、静香は呆然と聞いていた。

（ああ私と会った事もないこの人は、私達をちゃんと見て分かってくれるのに、どうして流は気付いてくれないんだろ…）
男の言葉はとても嬉しかった。

けれどその言葉を言っただけ欲しかったのは目の前の男ではない。そう思った瞬間、静香の目から涙が次々零れ落ちた。

「あつ……お、おい…どうしたんだ？」

男は余裕のあった顔を崩し、静香に手を伸ばしたり引っ込めたりと、どうしたらいいのか分からず慌てていた。

「チツ！とりあえずこっちに来い！」

またもや左手の手首を掴まれ、公園のベンチまで連れて行かれる。

「…座れよ」

男は自分の言葉通り静香が大人しく座ったのを見届けると、静香の左隣に座る。

「……………」

「……………」

お互い何も話さず無言の時間が過ぎる。

男はチラチラと静香を見ていたがしばらくすると、ポケットを探り始め何かを取り出す。

そして取り出した物を、静香に差し出した。

「……………ほら」

男が静香に差し出したのは、青い無地のハンカチだった。

「これは？」

「使え、汚くないねえ」

そう言つて男は静香に無理やりハンカチを持たせる。

「ありがとうございます」

静香はそのハンカチで涙を拭いた。

静香にハンカチを渡した後また男は黙ってしまったが、意を決したように静香のほうを向いた。

「悪かった」

「えっ？」

「さっき俺はお前を傷付けるような事を言つたんだろ？…俺はダチに口が悪いから気を付けろって言われるんだが、なかなか直らねえ。

俺が傷付けたなら謝る。だから…泣くな」

今まで自分の事だけで手一杯だった静香は、最初どうして男が謝っているのかわからなかった。

しかしよく考えれば、静香が泣いた時側にはこの男しかいなかった。しかもこの男が話しをしている時に泣いたのだ。

男が静香を傷つけていると思っても可笑しくない。

「ち、違います！」

静香は思わずベンチから立ち上がった。

「私…あの…さっき…悲しいことが、あつて…だから、貴方は何も悪くないんです、その…誤解させちゃってごめんなさい！」

男と目を合わせ勢いのままに話し、そのまま頭を下げる。

「止まったな」

男の声が頭の上から聞こえ、頭を上げた。

男は初めて静香の顔を見たときの様な、嬉しそうな顔をしてる。

静香の涙は止まっていた。

「俺が勝手に解釈して謝っただけだ。お前が悪いんじゃない」

自分を気遣う男の優しさに静香は嬉しくなった。

「ありがとうございます」

「お前は礼言ってばかりだな」

「そういえば…そうですね」

静香も目の前の男も、何時の間にか笑っていた。

静香はこんなに親身になってくれる、この男の事が知りたくなっていた。

「あの、貴方の名前教えてもらえませんか？」

「そういえば教えてなかったな、俺の名前は川神巧だ。かわかみたくみ お前の名前は？」

「私は神城静香っていいます。よろしく願いしますね」
涙はすっかり乾き、静香は巧に笑顔を見せた。

「……………」

しかし巧はいきなり黙ってしまふ。

「……………そういえばお前…何ですつと敬語なんだ？」

「いや…初対面ですし、先輩かもしれないじゃないですか？」

巧の様子に静香は慌てた。

「俺は高2だ。静香は？」

「…高校2年生です」

「なら問題ねえだろ？敬語止める。もし敬語で話しかけたら返事しねえ、あと名前も！俺を名字なんかで呼ぶんじゃないぞ！」

口調は荒っぽいが言っている事は子供のようだ。

笑いそうになるのを耐え、ここは自分が折れるしかないと考えた静香は、

言葉を探り巧に話しかけた。

「これでいい？…巧くん」

敬語を止め名前で呼んだのだが巧はまだ納得しなかった。

「…呼び捨てじゃねえのか？」

「……呼び捨てじゃなきゃダメ？」

（でも…）

静香は密かに呼ぶか呼ばないか格闘していたのだが巧はそれに気づかず、

仕方ないとも言つかのように、静香の頭に手をポンポンと軽く叩いた。

「今はそれで許してやるか。だけど、いつか呼ばせるからな」

「…うん」

静香は複雑な思いのまま頷いた。

「静香悪い、俺はこの後学校に行かなきゃなんねえんだ」

「今から？」

静香が公園の時計を見ると、時計の針は10:00になっていた。

「今日は朝連がなかったからな、サボってた。でも3限は、出ないと単位がヤベえから、休めねえんだ。静香はこの後どうするんだ？」

「私は…家に帰るよ」

静香にはこのまま平然と、学校に行く勇氣はなかった。

「そうか…なんなら送って行くぜ？」

「まだ昼間だし、大丈夫だよ！そんなに心配しないで」

送ってもらった様な面倒はかけたくなかったが、

これでもう巧と会えなくなるのかと思うと、静香は妙な寂しさを感じた。

「分かった…なら今、お前の携帯貸せ」

「何で？」

「いいから貸せ」

静香は鞆から携帯を出すと巧に手渡した。

巧は静香から受け取った携帯を弄り、自分の携帯も取り出し操作し始めた。

（もしかして…）

一通り終わったのか、巧は最後に2台の携帯を見て静香の携帯を返す。

「俺のアドレス登録しといたから、いつでも連絡しろよ」

巧は用は済んだとばかりに去っていく。

「巧君?! 待って!」

静香は展開に追いつけず巧を呼び止める。

巧は足を止め振り返り。

「またな、静香」

それだけ言つと足早に行つてしまった。

（強引な人）

静香は巧が見えなくなると、自分も家に向かい歩き出した。

そして数歩、歩いた時鞆を持つ手に違和感を感じ、鞆を持ち替える。すると鞆以外の物を握っていたことに気づいた。

（巧君のハンカチ…今度洗つて返そう）

静香は思わず笑みをこぼしていた。

手に持っていたハンカチを綺麗にたたみ鞆に仕舞うと、もう一度家に向かい歩き出した。

「静香、起きなくていいの？」

翌日、静香の母は毎朝静香が起きる時間に娘を起こした。

静香はベッドから起きてリビングに行きキッチンにいる母に声を掛けた。

「おはよう」

「おはよう、お母さん」

昨日母には、体調が悪くなり早退したと嘘を吐いた。信じたのか信じてなかったのかは分からなかったが、

静香は意外と体が強くいくら体調が悪くなっても、

1日寝ていればすぐに治つてしまうので、さすがに今日も仮病を使うことは出来ない。

「もう体調は大丈夫よね？朝ご飯出来てるわよ」

「うん」

仕方なく静香が椅子に座ると、テーブルにトーストとサラダが置いてあった。

静香はトーストが大好きでいつもは喜んで食べるだが、これから学校に行かないといけないと思うと、いくら口に入れても美味しいと感じられなかった。

「ごちそうさま」

朝食を食べ終え玄関に向かい席を立つと、今起きたばかりの父とすれ違う。

「行つてらっしゃい」

「静香、もう行くのね、行つてらっしゃい」

父が静香を送り出す声が聞こえたのか、皿を洗っていた母も遅れて静香に声を掛けた。

「…行つてきます」

憂鬱な気分だが両親共送り出してくれたのに、行かない訳にはいかない。

ゆっくり玄関に向かい靴を履こうとすると、なぜか呼吸が荒くなり始めた。

（…何？）

不思議に思つた静香だったがそれでも無理やり靴をはき、

玄関のドアを開け1歩踏み出したところで、崩れるように地面に膝をついた。

（息が、出来ない？）

首元を両手で押さえ息をするが、いくら息を吸っても体に入っていない。

浅い呼吸を繰り返す。

心臓はバクバクと激しく鳴る。

（苦しい、苦しい、苦しい、誰か…助けて…）
静香の意識は、そこでプツリと途絶えた。

未来への約束 第2話（後書き）

主人公のもう1人のお相手の巧が登場しました。
今度は流の存在が、空気ですね（笑）

この先の展開は何となく決まっていますが、
実は、ラストだけ、全く決まっていな感じです！！

なので、流と巧のどちらとくつつくか、私もまだわかりません（笑）
ラストが近くなったら、考えようと思います。

お読み下さりありがとうございました。

未来への約束 第3話（前書き）

この先本来の症状、原因等を過大に表現してあるので実際と異なる点もあると思いますが、ご理解の程よろしくお願いします。

未来への約束 第3話

朝8：00

静香はのろのろと布団から起き上がった。

リビングに行くと、父はもう会社に行ったのか母親しかいない。母はリビングの入口に立っている静香に気が付き、声を掛けた。
「おはよう静香、朝食用意するから椅子に座って待ってなさい」
いつもと同じように母は静香に接していた。

今日も変わらない母の優しさは、嬉しいと感じるが、同時に静香は自分が情けなく思えた。

「お母さん……ごめんね……ありがとう」

そんな静香に、母は笑いながら答える。

「何謝ってるのよほら早く座りなさい、すぐに持って来るから」

静香はコクリと頷くと椅子に座った。

2週間前

「……う」

静香が目を開けるとまず1番初めに、真っ白な天井が見えた。

（ここは……）

次に首を横に動かすと、心配そうにしている母の姿があった。

「お母さん？」

「目が覚めたのね、今先生を呼ぶからちょっと待っていなさい」
それだけ言っと、カーテンを開けどこかに行ってしまった。

（先生？……もしかして、ここは……）

静香は先程あった事を思い出し、状況を理解した。

（そうか……私は玄関で倒れて……病院に運ばれたのか）

突然だった。

胸が痛くて、苦しくて、このまま死んでしまうのではないかと、本気で思った。

静香が思い返していると、母が医者連れて戻ってきた。

その医者は、優しい雰囲気と比較的若い女の人だった。

「神城さん目が覚めたんですね」

「はい」

「どうしてここにいるのか、わかりますか？」

「倒れて、気を失ったんですよね……」

「そうです。ゆっくりでいいんで、その時の症状を話してもらえますか？」

静香はもう1度その時の事を思い出し始めた。

「えっと……学校に行こうと玄関に向かったらいきなり息が出来なくなつて、苦しくて……意識がなくなつて……気が付いたら、この病院にいました」

「わかりました……やはり……神城さんが倒れたのは、過呼吸症候群かこきゅうしょうこうぐんの所為だと思われます」

「過呼吸症候群ですか？」

「はい、10代や20代の若い人は発症しやすいんですよ。色々な原因が挙げられますが、主に心理的なストレスからくることが多いです」

（ストレス……）

「症状としましては息苦しさを感じたり、胸に圧迫感を感じる事もあります。他にも、激しい動悸や気を失う方もいます」

先生が言つどの症状にも、静香に当て嵌まった。

自分が弱い所為で両親に迷惑を掛けてしまったと、静香の顔は曇る。それに気がついた医者は、静香を励ますように静香の肩に触れた。

「過呼吸の発作が出てしまった時は、ペーパーバッグ法と言って紙袋等で口と鼻を覆い、その中で呼吸をする方法で症状が和らぎますよ。もちろん薬もありますから安心して下さい。それに発作が起こった人でも、その先1度も発作が出ず過呼吸症候群が治った例もあります。先程言った通り心理的な事から起こりやすいので、自分を追い込んで駄目ですよ」

「…はい」

その後も静香は母と一緒に、過呼吸症候群についての説明を聞き、病院を出てタクシーで家に帰った。

シーンと静まり返ったタクシーの中で母は、

「静香：学校行きたくないなら、行かなくてもいいからね」

それだけしか喋らなかった。

その時静香は昨日吐いた嘘が母には、ばれていた事に気づき1人苦笑いをした。

家に着いた母は静香を特別気遣うのではなく、普段通りに接していた。た。

それは父も同じだった。

しかし母が朝静香を起こす事はなくなり、

静香は倒れてからの2週間、家の中だけで過ごしていた。

朝食を食べ自分の部屋に戻った静香は、自分のベッドの上に座りこれからの事を考えていた。このまま家の中に居れば、発作は起こらないかもしれない。でもそれでは何も解決にならない。分かつてはいるが、学校に行き流に会う勇氣はなかった。その時ふと、勉強机に置いてある携帯が目に入り、流に傷つけられた日に出会った巧の事を思い出した。

ベッドから降り勉強机の側まで歩いた静香は、机の引き出しを開け中から巧に借りたハンカチを取り出した。巧と別れ家に帰った静香は明日にでも巧に連絡をしてハンカチを返そうと思い、

家に帰ってすぐにハンカチを洗いアイロンまでしていたが、倒れてしまった所為でハンカチを返しそびれていた。

（ハンカチ返さないと）

静香は携帯を手に取り巧にメールを送ることにした。

（えっと…こんなにちは、この前公園で会った静香です。あの時は色々ありがとう。借りたハンカチを返したいんだけど、どうしたらいいですか？連絡待ってます……こんな感じでいいかな？）

文章を打ち終わり携帯を持ったままもう一度ベッドに座ると、メールを送ってから数分も経っていないのに、静香の携帯がブルブルと震えた。

（もう返事が来たの？）

手に持っていた携帯を開くと、画面には巧の名前と着信の文字が表示

示されていた。

（えっ…電話？）

静香は慌てて通話ボタンを押した。

「…もしもし」

「久しぶりだな、静香」

電話に出た静香に、巧の声が聞こえてくる。

「うん、久しぶりあの、メール見たよね？」

「ああ、あんま時間ねえから電話にしたんだが不味かったか？」

「そんなことないよ！ただてっきりメールが来ると思ってたから驚いただけなの」

「ならこのまま電話続けるぞ。話し戻すが、ハンカチ返したいんだろ？律儀な奴だよな…」

「そうかな？」

「構わねえけどな、今日の夜8時にこの前会った公園で会おうぜ」

「今日？」

「なんだよ、都合悪いのか？」

「そういう訳じゃないけど…」

前回会った時の様に強引な巧に静香は戸惑っていた。

巧はそんな静香の様子に気づき、不満げな声を出す。

「けど何だよ？」

声のトーンが下がった巧に静香は慌てて返事をした。

「…分かった。今日の8時に公園ね？」

「ああ、マズイそろそろ授業始まるな、お前んともそうだろ？」

「……私は…」

思いがけないセリフに驚く静香が巧の質問に答える前に巧が話しを続けた。

「！担任来たからもう切るぜ！見つかると面倒なんだ、また後でな」
そう言い終わると静香の返事も聞かず、巧は電話を切った。

静香は今学校に行けていないと、一瞬話そうかと思っただがまだ会って間もない巧に、

気を使わせてしまうのではないかと躊躇^{ためら}っていたので、巧の質問に答えなくて済み静香は安堵していた。

2週間振りに外に出る事になった静香は、発作がもし起きてしまった時の為の用意と、着て行く服を選びだす。まだ巧と会うまで10時間以上ある事に静香が気づくのは、出掛ける用意が全て終わった後のことだった。

宝聖学園のグラウンドでは、今日も野球部は放課後の練習をしている。

静香が学校を休み2週間、野球部の様子は大きく変わっていた。今まで静香がしていた仕事が1年のマネージャー達に回り、1年達は静香のしていた仕事が分らず、あまりの大変さにこの2週間で2人のマネージャーが野球部を辞めてしまった。

残った3人の内2人は何とか静香の様に頑張ろうと努力し始めたが、白羽だけはどんなに忙しくても変わらなかった。

決まった時間通り休憩になり、白羽が部員達にタオルを1人1人に配り始めた。

「マネージャー、ドリンクは？」

タオルを受け取った中山がドリンクが無い事に気づき、質問をした。
「えっ…今他の2人が作ってます」

タオルを配っていた白羽の返答に中山の隣にいた流が苛立たしげに答える。

静香がいなくなっしてから流は日に日にやり場のない苛立ちを感じていた。

「チツ、タオルなんか配ってねえで、ドリンク早く作って持って来い！」

「……タオルを配るのだって私達の仕事です」
「何？」

好戦的な白羽を流は睨みつける。

そんな流の態度が白羽のプライドを傷つけたのか、白羽の不満が一気に溢れだした。

「元々ドリンク作りみたいな地味な仕事は全部あの人ができるはずじゃない！なのに何で私がそんな事しなきゃいけないのよ！もう辞めるわよ！野球部なんて！！」

それだけ言うと、まだ持っていたタオルを投げ捨てパタパタと走り去った。

目の前で怒り去って行った白羽の姿を見て、部員達が騒つきだす。

「…京香ちゃんも辞めたか…これで3人目だな…なあ流そろそろ…」

「…オイ流！」

流は中山の言葉を最後まで聞かず、騒いでいる部員達を尻目に、グラウンドの隅に生えている1本の大きな木の側に移動した。

流がその木の根元にしゃがみ込み俯いた。

そのままぴくりとも動かずしゃがんでいる流の前に、

何時の間にいたのか中山は、流の目の前に立ち流を見下ろしていた。

中山が近くに來た事に気がついた流は、
ぼおっとした様子で目の前の中山を見上げる。

「…何だ？」

中山は流を見下ろしながら、どこか怒った様子で流に話しかけた。

「…白羽達の事は確かにお前の言い方も悪いが、流だけの所為じゃないから別に何も言わない。でもな静香ちゃんは違う。この2週間で静香ちゃんが、野球部の為にどれだけ頑張ってくれてたか分かっただろ？」

「……………ああ」

「なら、謝りに行けよ」

中山はずっと流を見つめ話したが、流は中山が来る前の様に目線を下げ地面を見つめた。

「……………行かねえ」

「はあ？」

流石に流も謝りに行くと思っていた中山は、流の意外な一言に驚き声を上げる。

「謝れるわけねえだろ！」

流は勢いよく立ち上がり、木を思い切り殴りつけた。

「静香にだけは、俺が間違いだった何て…認められねえ」

そう言った流は苦しそうで、流自身は謝りたいと思っているのに、プライドが邪魔をして静香に謝れないのだと、中山はすぐに分かった。

「…はあ、お前は…本当に面倒な奴だな！これ以上俺が言ってもお前は聞かないだろうから、これで最後だ……………このままじゃお前、後悔するぞ」

「……………」

「恰好付けて、失くしてから後悔したって遅いんだぜ…俺が言えるのはそれだけだ」

「……………」

何も答えない流に背を向け中山は離れた場所にいる部員達の元に歩き出した。

残ったマネージャー達が、作って持ってきたドリンクに群がっている部員たちの姿を

遠くに確認した中山は、マネージャーに声を掛ける。

「マネージャー！俺にもドリンクくれ！」

中山の大声が流の耳にも聞こえたが流はその場から動かず、何かを考えるように目を閉じた。

未来への約束 第3話（後書き）

静香ちゃんは、次から次へと問題が…

でも最後は誰とくつついても、静香ちゃんは幸せにするつもりです！

お読み下さりありがとうございました。

未来への約束 第4話

誰もいない静かな夜の公園のベンチに1人、小さなカバンを持った静香は、俯き加減で座っていた。

時折左の手首にある時計と、公園の入口に目を向けそのたび、また俯き、残念そうにため息を吐いていた。

すると静香の耳に、遠くから自分の側に向かって走る、誰かの足音が聞こえてくる。

静香が顔を上げると、制服を着た巧が走って、静香の座っているベンチの前まで来た。

巧は持っていたカバンを、無造作に足元に置くと静香の隣に座る。

「悪い、待たせたな」

「ううん、そんなに待ってないよ」

静香がそう言うと、巧は真剣な表情になった。

「いや、この公園は人がいないのを知ってたのに、夜にお前をこんな場所で1人にして、もし何かあったら俺の所為だ、悪かったな、次からは近くにある喫茶店にしようぜ」

「うん！」

静香は笑って巧を見た。

自分を心配してくれた事も嬉しかったが、

巧はまた静香に会う事を、当たり前のように話していた事が、静香には嬉しかった。

他愛無い会話を続ける2人。

「あっそうだ」

「なんだ？」

不意に静香は巧にハンカチを、返さないといけない事を思い出す。

「借りたハンカチ！今出すね！」

カバンの中のハンカチを出すため、巧から視線を外す。

その時静香の視線が、公園の外を歩く人物に気がついた。

瞳孔が開き、動きが止まる静香。

急に固まったように動かなくなった、静香の姿を不思議に思った巧は、

手を静香の前で振ってみたが、静香は何の反応もみせない。

「静香？」

（あれは…）

「おいどうしたんだ？」

静香の視線の先には、白羽京香が友達らしい少女と2人で歩いていった。

白羽達と静香が座っているベンチは距離がある為、

何を話しているのかは分からない。

白羽は静香の存在に気づかず、楽しげに歩いている。

公園の外を歩いているのが、白羽だと気付いた静香の息が、荒れ始めた。

（うそ…どうしよう!?!）

息が荒くなり、発作が出るのではないかと、静香はパニックになっていた。

「静香!!」

静香の体が何かに優しく包まれた。

（えっ？）

静香はゆっくりと隣を見る。

隣に座っていた巧は見えなかったが、その代わりに静香を抱きしめる、巧の体が見えた。

「大丈夫だ」

まだ荒い呼吸を繰り返す静香の背中を、巧はトントンと、小さな子供を寝かし付けるように、優しく叩く。

徐々に静香の息は普段通りに、戻り始めた。

巧は叩くのを止め、両腕で静香をぎゅっと力を込め、抱きしめた。

「俺がいる」

その言葉を聞いた静香の目から、涙が一粒流れ落ちた。

落ち着きを取り戻した、静香の様子を感じた巧は、

静香を抱きしめていた手を離れた。

結局白羽は静香に気づくことなく、何時の間にかいなくなっていた。

「平気か」

「…うん…ごめんね…」

静香の心の中は、自己嫌悪でいっぱいだった。

「あのなあ」

巧は大げさなぐらいのため息を吐くと、静香に呆れたような眼差しを見せた。

「何で謝るんだ？」

「だって…また、巧君に迷惑かけちゃったから…」

「俺は迷惑なんて思ってたねえ、勝手に俺の気持ちを決めるな！」

「…ありがとう」

「俺は自分の気持ちを言っただけだぜ、静香も言いたい事があるなら言えよ」

その時静香は巧に、自分の事を話す事を決めた。

「…巧君」

「何だ？」

「私の話し巧君に聞いて貰いたいの、聞いてくれるだけでいいけど…話してもいいかな？」

「ああ」

静香は巧に、今までの事を話した。

1年生のマネージャー達の事、過呼吸症候群の事、

学校に行っていない事、そして流の事も何もかも全て。

まだ会って2回目にも拘わらず、静香は巧に包み隠さず話をした。巧は静香の話が終わるまで、何も言わず相槌だけを打っていた。

「——これでおしまい、全部自分でどうにかしなきゃいけない事

だけど、巧君が聞いてくれたから、スッキリしたよありがとう」

話が終わった静香は、窺^{うかが}うように巧の顔を見た。

「なあ」

「な…何？」

ずっと黙っていた、巧が口を開く。

「俺と付き合えよ」

「……………えっ…それって、どういう意味で…」

「俺の女になれ」

「……………ええええええ！！！」

先程までの雰囲気が一変した。

「な、なな何言ってるの巧君!!」

いきなり静香が驚く事を、平然と言い出しす巧に、動揺した静香は、さつきとは違った意味で、パニックになっていた。

「別にからかつてる訳じゃねえからな」

「ど、どうして、いきなり…」

「静香が気にいったんだ…お前が自分の事を、俺に話してくれたと思ったら我慢できなくなった」

「…でも」

「返事はいらねえ」

「どう、いうこと？」

「今日から1カ月間、静香の時間を俺にくれ、って言っても特別に何かする訳じゃない、話したりどっか行っただけだ」

「……………」

「1ヶ月後に俺の事を知ってから返事をくれ、言っとくが拒否権はねえからな」

「…ないの？」

「ああ、今すぐ付き合えって言わないだけマシだろ？」
自信満々に言い切る巧に、静香は反論が出来なかった。

「巧君はいつも強引だよ…」

「それが俺だからな、明日からは毎日8時に喫茶店な」

「えっ！もしかして毎日会っの？」

「1カ月でお前を俺に惚れさせないといけないんだぜ？当たり前だろ」

未来への約束 第5話

巧が公園で静香に告白した日から

あの時の言葉通り、2人は毎日の様に会っている。

休みの日には遊園地や映画館に行く等、巧は出来る限りの時間を静香と過ごし

学校のある日は夕方から喫茶店で今日あった事やお互いの事について話をした。

話しをするうちに、2人供公園の近くに家があることや、クラスは違ったが同じ小学校に通っていたことなど、

話してみても初めて知る事も多く、最初は戸惑っていた静香も、時間とともに巧という日々を純粋に楽しむようになっていた。

ただ静香はいまだに学校に行けていなかった。

巧に会うために外に出る時は躊躇なく行けるのだが、学校に行くとなると途端に足が進まなくなってしまう。

静香の両親は静香が毎日、誰かと会いに出掛けることを心配していたのだが、

発作や学校に行けず落ち込んだ様子の静香が少しずつ、

元気を取り戻しているのを感じ、何も言わず見守る事を決めた。

返事をする日まで後2日になった日、巧への返事に悩む静香の元に1人の人物が訪ねてきた。

その相手は静香のクラスの担任の木村陽子（きむら せいこ）だった。

木村は静香が学校を休みだしてから静香を心配し電話をくれていた

のだが、

いきなり静香の家まで訪ねてきた木村に、嫌な予感がしたが、静香はその気持ちを隠し木村をリビングに通した。

「どうぞ」

「ありがとう、神城さんのお母様は今いらっしやらないの？」

「はい、母は夕飯の買い物に行ってるんです。でももうすぐ帰ってくると思います。その椅子に座ってください、先生飲み物は紅茶で大丈夫ですか？」

「ええ、でも気にしなくていいのよ」

静香はキッチンで手早く木村と自分用の紅茶を用意しリビングに戻ると、

木村の前に紅茶を置き、静香は紅茶を持ったまま木村の向いの席に座った。

「ありがとう……実は今日神城さんの家に来たのは、神城さんに大切な話があったからなの」

「……………なんですか？」

「単位の事よ」

静香の顔が曇る。

「成績の事なら補修を受ければ何とかなるけど、欠席の回数だけではどうにもならないの。神城さんは発作の事で学校に行きづらいと思っているのかもしれないけど、私も出来る限り神城さんをサポートするから……学校に来てみない？」

（どうしよう）

静香は何時もの喫茶店で巧が来るのを待っていた。

木村との話しは静香の母が家に戻ってきた事で中断となり、母と木村が話をしている途中に、静香は何も言わず自分の部屋に戻る。

る。

しばらく部屋のベッドの上でじっとしていると、玄関の開く音がし木村は帰って行った。

その後静香は母と2人で夕飯を食べた。

母は食事中色々な話を静香に話したが、1度も学校に関する話をすることはなかった。

夕食を食べた後、巧との待ち合わせまではまだ少し時間があつたが、静香は早めに家を出た。

「静香、今日も早いな」

「そう?」

巧は喫茶店に入るとすぐに静香を見つけ、

カウンターでコーヒーを買った笑顔で静香と同じテーブルに来た。

「何かあつたのか?」

席に座った巧は真剣な顔で静香に尋ねた。

「...どうして?」

「お前は考えてる事がすぐに顔にでるから分かるんだ。ほらそんな顔するぐらいなら早く話せよ」

学校の事を相談しようとしていた静香だったが、

自分の様子がいつもと違う事に、すぐ気がついた巧に静香は驚きを隠しきれない。

「巧君には隠し事できないな...あのね」

「静香はどうしたいんだ？」

「えっ？」

静香は巧に木村から聞かされた話を話すと、巧は静香にそんなことを聞いてきた。

「学校に行くか行かないか、決めるのは静香だろ。他人の意見は無視してお前がこの先どうたいか考えてみる」

「私は…」

静香は自分がどうしたいのかを考え始めた。

（学校に行けば、流に会わなくちゃいけない…流の姿を見たらまた発作が起こるかもしれない……でも）

「行きたい」

静香は自分に言い聞かせるように呟いた。

「正直に言つと流に会うのが怖いのに…それに発作が起きたら、いろいろな人に迷惑が掛かっちゃう…でもこのままじゃいけないと思うから…だから学校行ってみる」

「そうか」

巧は嬉しそうに静香に笑い掛けた。

「明日から学校行こうと思う」

「明日からか？」

「時間が経つと勇氣なくなっちゃう気がするから…」

その言葉を聞き少し考える様子を見せる巧。

「なあ、明日はとりあえず様子見ていいんじゃないか？」

「どういうこと？」

「静香が不安なのは流って奴に会う事と、発作が起きないかって事なんだろう？いきなり長時間学校行くより、明日は野球部の連中に出会ってみる。アイツに会って発作が起きないなら次の日から普通に学

校に行けばいい」

「……………うん」

流に会うという言葉聞いて暗い顔をする静香。

「そんな顔するな、安心しろ俺も付いて行つてやるから」

「えっ！」

思いもよらない巧の発言に驚く静香。

「明日は部活が休みなんだ、だから俺も付いて行つてやるよ」

「……………本当に部活休みなのか？さぼるうとしてない？」

疑う様な眼差しで巧を見る静香に、巧は呆れたような顔をする。

「お前…言つようになつたな…」

「ずっと巧君と一緒にいたんだから仕方ないよ」

「まあいい、今日の所はそういう事にしといてやる……………お前は明日5時に、ここで待つてろ。俺も学校が終わつたらすぐここに来るか
らその後、宝聖に行くぞ」

「…ねえ、やつぱり私」

巧の言葉を聞いて静香は巧にそこまで迷惑を掛けたくないと思い、
学校には自分だけで行くと言おうとするが、

巧は話す内容が分かつていたようで、静香が全て言い終わる前に話
しを遮る。
「1人で行くなんて言葉なら却下だぜ」

「うっ」

「言つとくが俺は迷惑だなんて感じてねえ。俺は静香が好きだから
少しでも長く側にいたいだけだ」

何て事のない様に巧は話したが、静香は一気に顔を赤くし狼狽た。
うろたえ

「た、たく巧く、ん今…私の事…す、好き、って言った…の?」

「なんだ?俺の告白がそんなに嬉しいのか?」

静香が動揺している事に気づいた巧は、嬉しそうに静香をからかう。

「そ、そう言う事じゃなくて…巧君、私が好きなの?」

「はあ?当たり前だ!この前ちゃんと告白したじゃねえか!」

「だって…気にいったとしか言われてないから」

「好きでもない女に告白なんてする訳ないだろ!」

嬉しそだった巧の顔が不満げに変わる。

「明後日まで言うつもりはなかったが、お前がそのつもりなら本当の事教えてやる」

「どういうこと?」

「俺はずっとお前を知っていた。初めて宝聖に練習試合に行ってお前を見た時すぐに静香だって気づいたんだぜ?」

「えっ?」

「小学校で何度か話した事があったからな。それなのに静香はまったく覚えてなかったけどな」

「…ごめんなさい」

巧が自分の事を昔から知っていたとは思いつかなかった静香は、覚えていなかったという事実で申し訳ない気持ちになったが、その後の巧の今まで以上に驚くべきセリフにその気持ちはすぐ忘れた。

「ショックだったぜ?初恋の女に忘れられるのは」

「初恋!?!」

「ああ、高校に入って静香を偶然見つけて練習試合に行くたび、静香に話し掛けられないかと思ってたんだ、でも静香が一生懸命野球部の為に働いてるのに邪魔できないだろ。それに…アイツを好きな事は見てればすぐ分かったしな」

「……………」

巧の驚くべき告白に言葉の出なくなつた静香をよそに巧は話を続ける。

「公園で静香とぶつかった時、めちゃくちゃ嬉しかったんだぜ、泣かせちまつたけどな…静香が悩んでるのに気付いた時お前の支えになりたい、静香が好きだつて改めて思つたんだ」

「……………」

「伝える気はなかつたんだが2回目に会つた時、静香が俺に悩みを話してくれただろ？その時自分の気持ちが抑えられなくなつちまつたんだ。」

「…巧君」

「俺は静香に幸せになつて欲しい、出来るなら俺が静香を幸せにしたい。まだアイツが好きでもいい、静香が好きだ。俺と付き合ってくれ」

心の奥にしまっていた静香への思いを伝えた巧は、妙に清々しい気分だった。

反対にその気持ちを伝えられた静香は思考が停止していた。

「おい、大丈夫か？返事は明後日…な」

「……うん」

「でも今の俺の告白は、明日学校に行つて帰ってくるまでは忘れてもいいぜ」

無茶なことをサラッという巧に静香の思考は働き始めた。

「忘れるなんて無理だよ…」

「なら忘れなくていい、明日はずっと俺の事考えてるよ、そうすれば学校何て簡単に行けるぜ、きつと」

その時静香は明日への不安とそれを上回る心強さを感じた。

未来への約束 第6話

翌日

静香は巧と学校に向かい歩いていた。

静香はゆっくりでありながらも、足を止めることなく巧の1歩後ろを歩く。

道中1言も話す事は無なかったが、お互いの手を2人はしっかり握りあっていた。

いつもの喫茶店で会った時、巧は静香にいくつかの約束をさせた。学校に行く道はなるべく、

下校する他の生徒達と会わないようにする為、巧に任せる事。

もし辛かったら無理せず帰る事。

最後に学校に行くまでの間、手を繋ぐというものだった。

静香は巧との約束を守る代わりに、野球部の部員と会っている間、巧には校門で待っていてほしいと頼んだ。

聞いた直後は静香の側にいると言った巧だったが、

静香に自分が戻ってくるのを待っていてもらいたいと言われ、

悩んだが部外者の巧が静香の側にては、部員達が混乱するだろうし、

校門からでもグラウンドの様子が见られる事を思い出した巧は、校門で待つ事を承諾した。

（もうすぐだ…）

校舎が見える場所まで行くと静香の足が止まり俯いてしまった。巧も同じように足を止める。

静香が不安げに巧を見ると静香と手を繋いでいない手で、ポンポンと頭を撫でた。

「大丈夫だ、俺がいるだろ」

「あっ……」

巧が静香に言ったセリフに以前の記憶が蘇る。

巧の前で発作が起きてしまった時も、巧は同じ様な事を言っていた。今回もその時の様に、静香は落ち着きを取り戻す事が出来た。

「ありがとう… もう大丈夫、行こう」

「ああ」

宝聖学園の校門まで来ると、どちらからともなくお互いの手を離す。

「行つて来い」

「いつてきます」

静香は巧に背を向け、振り返る事なく野球部の練習している校庭へ向かう。

巧はその後ろ姿を校門に寄りかかり見送った。

（大丈夫、私は大丈夫）

静香は1人心の中で、繰り返し自分に言い聞かせていた。その間右のポケットをずっと触っていた。

ポケットの中には、巧に返しそびれた青いハンカチが入っている。早く返さなければいけないと思いつつ、機会を失いなかなか返せずにいた物だが、

今日はお守り代わりに持ってきている。

勝手だとは分かっていた静香だったが、自分が色々な意味でもう平気だと思ったら、

このハンカチを巧に返そうと決め、もう暫くの間ハンカチを借りる事にした。

（…よし）

野球部は今休憩中の様で、思い思いに休んでいる姿が静香の目に映る。

部員達はまだ誰も静香がいる事に気づかない。

声を掛ける為校庭の中に入ろうとした時声を掛けられた。

「静香先輩？」

静香が振り返るとそこには、両手にドリンクの入った籠を抱えた後輩のマネージャーの吉川よしかわみおがいた。

「やっぱり！静香先輩！！」

みおは籠を地面に置くと静香に飛びついた。

「えっ！？」

いきなりの事態に状況が飲み込めず、焦る静香をよそに、みおは泣きそうな顔で静香に抱きついていてる。

「静香先輩…ごめんなさい」

「？」

「だ…だって…マネージャーの仕事がこんなに大変だって知らなかった…うつん^{らく}楽しようと先輩1人に大変な仕事押し付けてた…アタシ達の所為で…先輩…来なくて…だ…から…ごめん…なさい」
抱きついたまま、泣きだしたみおの背中を優しく撫でる。

「うつん違うよ。色々な仕事やつてもらえるように私が皆に強く言わなきゃいけないかったの…だからおあいこだね」

「せ…んぱい！」

静香はみおを腕の中から離し、みおの顔を見て微笑むとみおも微笑み返した。

そんな静香達の様子に気づいた野球部の部員達や

もう1人のマネージャーも静香の周りに集まってきた。

「神城！来てたのか！」

「心配してたよ？」

「神城がいなくて大変だったんだ」

「先輩来てくれたんですね！」

次々に声が掛かり戸惑いつつも、静香は嬉しさを感じていた。

「静香ちゃん！」

一際大きな声で名前を呼ばれ見てみると、中山が静香の近くへ走って来るのが見える。

「はあ…はあ静香ちゃん来てたんだ！」

「あっ……」

中山に返事をしようとしたその時、中山の後から歩いてきた姿に目を奪われた。

（流…）

「……………」

流は静香の近くには来たものの黙ったまま何も話さない。

静香も流の姿を見た時から、一言も話さなくなってしまった。

周りにいた野球部員達も静香と流の様子がおかしい事にすぐに気付き黙った為、辺りは重苦しい空気が流れていた。

「えーと…静香ちゃんが来てくれて俺達も嬉しいぜ！またマネージヤーやってくれるだろ？」

そんな重苦しい空気を変えようと、中山は静香に明るく話し掛けた。

「皆がいいなら…続けたいと思ってるんだけど…」

「そんなのいいに決まってる！なあ皆？」

中山の問いに部員達は皆、もちろんと答えた。

「流もいいだろ？」

1人黙っていた流に問いかけると、皆一斉に黙る。

「……勝手にしろ」

ビクッ

一瞬静香の肩が震える。

「流！もうちよつと言ifah考えろよ！」

「……………」

「流！！」

一言話すと流はまた黙り込んだ。

「ったく…静香ちゃん、流言ifah方は悪いけど来ていいて事だから、気にすんな」

「…うん」

静香の顔が悲しげな事に気づきながらも、

中山は気づかない振りをしてそのまま静香と話を続ける。

「この後どうする？ジャージないよな？」

「明日から学校にも行くから、明日の放課後から部活に出るよ。だから今日は帰るね」

「そっか、分かった。また明日な」

「うんまたね」

静香は部員とマネージャー、側にいる1人1人に挨拶して校門へ向かった。

結局最後まで静香と流が話す事はなかった。

静香が歩き出すと部員達は、マネージャーからドリンクを貰い話し始める。

だが流だけは微動だにせず、静香の後ろ姿を見つめていた。

「本当にお前は馬鹿だな…改めて思った」

流の隣に立ち同じ様に静香を見ていた中山はひとり言の様に呟いた。

「……………」

「はあ…お前は1人反省会でもしてろ！」

何も話さない流に呆れたのか、中山は流の側を離れた。

流の側には誰もいなくなった。

だから流が校門にいた巧と静香の姿を見て、

苦しい表情を浮かべていた事を知る人物はだれ1人いなかった。

「ただいま」

「おかえり」

校門で待っていた巧に声を掛け、2人は歩き出した。

「頑張ったな…体大丈夫か？」

「うん、平気だった。ねえあの公園行きたいんだけどいいかな？」

「いいぜ」

「ここで初めて会ったんだよね…」

公園に着いた2人は辺りを見回し初めて会った日を思い出す。

「正確には初めてじゃねえけどな、あの時俺は心臓が飛び出るかと思う程驚いたんだぜ？」

「そうだったの？」

「ああ、何とかしてお前と近づこうと考えてたらいきなり泣かれたて、どうしたもんかと迷ったぜ」

「ご、ごめん」

「何謝ってんだ？今こうして静香と居られるんだ結果オーライだろう？」

静香を子突きながら笑う巧を見た静香は、いきなり真剣な顔をした。

「どうかしたのか？」

雰囲気が変わった静香に気づいた巧は心配そうな顔をする。

「巧君：あの…後ろ向いて欲しいの」

「いきなりなんだ？」

「お願い聞かないで…それともう1つだけ、私の話が終わるまで黙ってそのまま後ろ向いてて…お願い」

真剣な様子の静香に巧は黙って頷き静香に背を向けた。

巧が後ろを向いた事を確認した静香は、深呼吸してから話し始める。

「巧君：今日私が学校に行けたのは巧君のお蔭だよ…ありがとう」

巧は小さく笑ったが、静香の言葉通り喋らず静香の話しの続きを待った。

「それだけじゃない、もし巧君がいなかったら私は今も部屋の中で

1人うずくまっ たままだっ たかもしれない……」
静香はそつと巧の背中に額を当てる。

「ありがとう、あの日巧君に会えて良かった」

「……………」

「…………… 巧君ごめんなさい、私フライングしちゃっ」

風の音しか聞こえない公園の中で、

静香はもう一度深呼吸して巧に自分の気持ちを伝えた。

「私を… 巧君の彼女にしてください」

その言葉を聞いた瞬間巧は振り返り静香をきつく抱きしめる。

「…………… 嘘じゃねえよな？」

「… 本当だよ」

静香は両腕を巧の背中にまわし抱きしめ返す。

「大切にする」

「うん」

「ずっと俺が側にいてやる」

「うん」

「静香… 好きだ」

「… ありがとう」

静香は巧の腕の中でゆっくり目を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1485u/>

未来への約束

2011年11月16日13時06分発行